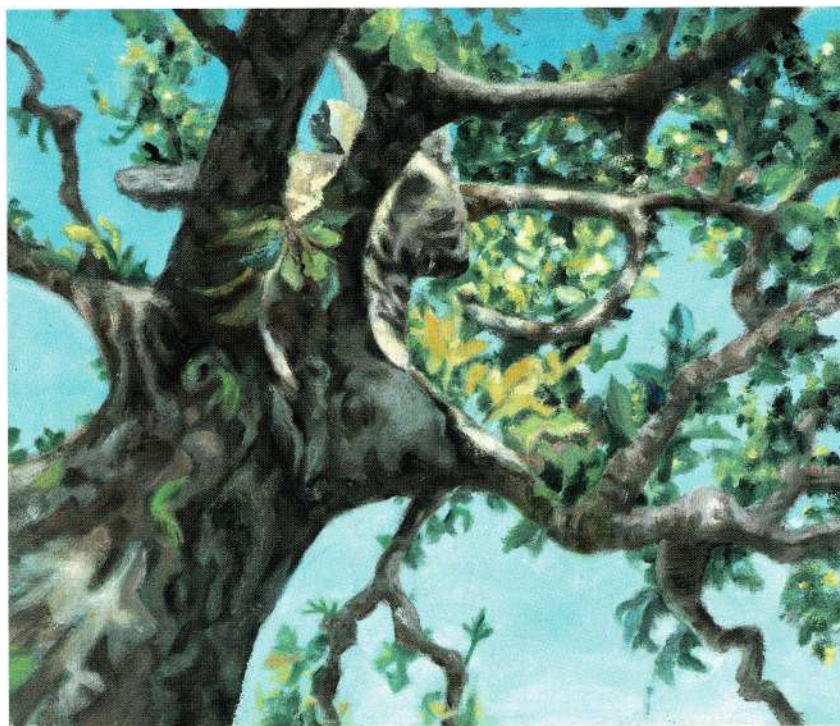


村野次郎創刊

香蘭



2023年(令和5年)7月号

第100卷

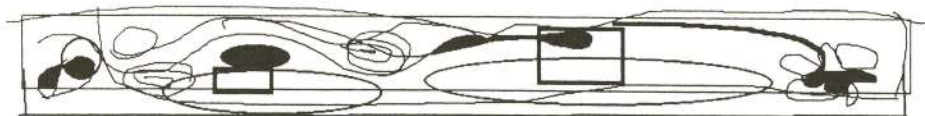
第7号

通卷1111号

二〇二三年(令和五年)七月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇〇卷第七号



香 蘭

2023年(令和5年)7月号
第100巻 第7号 通巻1111号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(95) 藤本 佐知子 表二
作 品 一 2

二 20
三 28
推薦香蘭集 36

香 蘭 集 37

作品一 十首選(五月号) 千々和久幸選 14
作品二・三 十首選(五月号) 桜井 京子選 16

一頁公論(26) 私の庭への愛着 13
村野次郎への旅(159) 18

羊屋の回覧板(1) 困った事になっちゃった 27
転載 京都新聞「天眼」欄 27

忘れてはならないが、蘇らせてはならない言葉 34
私の読む現代短歌(20) 稲葉京子の清潔な抒情質 40

エッセイ・自由研究 最後の十日間 42
焦 点(五月号) 自然から力をもらう歌 44

作 品 評(五月号) 作品一 46
作品二 48
作品三 50

香蘭集 52
七 首 抄(五月号) 54
耳言あれこれ(20) 55

緑 地 帯 56
普沼・市川・山本(田)・佐伯 54
柏原(貞)・矢口・小笹 55

明宝研究会第一三九回 四月例会 式子内親王と定家の恋愛関係 60
および能「定家」 68

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向 66
歌会及び会合・会員消息・他 74

編集後記・新宿日記 78
表紙絵 表三

中村 陽子「春ひかる」 目次・緑地帯カット 和雄

村野次郎作品 私の愛誦歌 (95)

藤 本 佐知子

盆栽の手入れ親しむ兄のそば

言葉なく来てわれもかがみぬ

『続袴風集』

『村野次郎三百首』では、『続袴風集』から四十四首が採られています。その中で昭和十六年の作品はこの一首だけです。昭和十六年は私の生年と同じということで親しみを感じてこの作品を選びました。

一読して情景が目に見えるように立ち上がって来ます。しかし、よく読むと四句の〈言葉なく来て〉が気になります。

訪問することを事前に知らせずに来た、突然の訪問だったのか。あるいは、訪問したら、お兄様が熱心に盆栽の手入れをなさっていたので言葉をかけるのを憚ったのか。

私は後者の方と読みました。熱心に手入れをなさっている姿を見て、親しみと尊敬の念に打たれ、お兄様の手捌きを、腰を屈めて同じ目線で見られる優しい先生のお姿が浮かびました。語らずとも通じ合い、分かり合える兄弟愛と、その時代背景も偲ばれ、心地良い作品と思います。

〔『続袴風集』186頁、『村野次郎三百首』48頁に掲載〕

四選者の作品

竹藪に犀が

平塚 千々和 久 幸

朝刊を広げとりあえず爪を切るそれより先は藪の中なり

用のある時だけ電話をかけて来しもつとも解り易き友死す

生きるのが辛いときみは言つたねえ ああまた今年もさくらが咲いて

明日のこと思い煩うほどもなく目刺し焼きおり行く雲を見て

用済みとなりし風景貼り合わせプロットのなきドラマに戻す

あれもこれも遠い昔になりました藪枯らしの花がこんなに咲いて

氣を付けてお帰りください竹藪に犀が潜んでいるやも知れず

妻よ今日は一万歩余り歩いたよおまえが生きていた日のように

水漬くさくら

我孫子 丸山 三枝子

起きてから寝につくまでを動きいる手足をほめて床につくなり

喜怒哀楽こもごもありて堀割に水漬くさくらに会いに来たりぬ

くぐりゆく桜木どれも知り合いと思ひ三年ぶりに仰げる

空へ空へ昇りゆくなりさくらばな声などあげてゆくにあらずや

そそくさと春は逝くなり掘割に今年かぎりのさくら降る降る

マンシヨンの春の窓辺をかざりいし桜散るべくなりて散りゆく

さくら降る千鳥ヶ淵にあそびたる今年の春が昔のような

帽子には帽子の思ひ少し凹みその辺にいつもひよいと置かれて

五十年へて

東京 桜井 京子

田舎者は田舎者らしくとやうやくに思ひはじめつ五十年へて

古里の森にひつそり射干の花だれにも知られず終はるもよけれ

古里の水辺に棲みしオオサンショウウオ醜女でいいと言つてくれしが

探しあくね探すをやめればひよつこりと戻りて来たり書類いちまい

真面目さを褒めたつもりか褒められて傷ついてゐるタンポポの花

「時間がない」わたしは弾けるほかになく庭に椿がまだ咲いてゐる

パソコンはコーヒーが敵あびせられ暗黒の画面となりてしまへり

AIがビルの警備をするといふ人類滅亡前夜のやうだよ

あああおとして

横浜 渡辺 礼比子

夜の夢に見ては憧るるふるさとそのまた奥の山河のかなた

歌一首でできなかつたらどうしよう 三溪園が見え始めたる

過ぎし日の吟行会に盛りいし蓮の花の今日は二分咲き

藤棚の下までもに来たりしが歌作に浸る君置きて立つ

囲炉裏火の煙漂う矢筈原家おかえりなさいと声することし

茅葺きの屋根より伸ぶる雑草のおおおとして春たけにけり

吟行の制限時間二時間の隙に食みしと三溪ソバを

「窓の外は練兵場」と惚けたる母言えり如何な青春なりし

作品一 十首選



(五月号作品から)

千々和 久 幸 選

・大江戸線六本木駅しばしばもアバンギャルドな人乗り降りす

渡辺礼比子

眼目は四句の「アバンギャルドな人」。「アバンギャルド」と言えば二十世紀初頭のヨーロッパの芸術運動を想起するが、この国では1950年代初頭の「前衛短歌」の隆盛期に耳にした程度で潰えた。ここではその言葉のニュアンスをひと昔前の「大江戸線」と対比的に捉えて、クスリと笑わせる所がお手柄。大江戸線なら八丁堀とか小伝馬町、御台場が似合うが、鉄道人にそんな洒落つ気はない。で、肝腎の「アバンギャルドな人」とは、今風に「飛んでる人」とでも読んでおこうか。

・かたはらに居眠り始めるこの人が運命の人といまだ思へず

桜井 京子

一見、軽く詠み流したという風情の歌。だがこんな歌が読者の氣を引くことを作者は十分承知の上。なぜって短歌の世界では「個人情報」こそが生命で、これが見えないと忽ち「作者の顔が見えない」という弾が飛んでくる。

そこを逆手に取ってひと捻りした歌。だから内容的にはパラドックスと読めるが、虚実の境目を揺すって本音は見せない。ゆめ騙されてはならず。

・つばさなきもの飛ぶ世なり鴨よミサイルまたも飛距離をのばす

岡野 甫江

一読、達者な歌だと感心させられた。一、二句の着眼が巧に下句を引き出した所もいいが、上下句を繋ぐ間に挟まれて殆ど無意味に見える「鴨よ」の呼吸が、絶妙である。この事実の行方を作者は、愚かな人間に問うことはしない。

いや一首の背景にある具体的な事実は、この国の誰もが共有しているから説明の要はなからう。よしんば幻視の所産であっても、これが現下の危機への痛烈な一矢であることに変わりはない。

・良く言えば個性豊かな同僚と長く仕事し少し疲れき

川原 優子

良く言えば个性的だが悪くいえばどうか、は言わぬが花。その心は下句の具体を読んでくれという歌。思い当たる読者が多からう。読者周知の事実を駄目押的に呟いて、共感を呼ぶ。個性が必要以上に尊重される時代風潮への、ひそかな（風を装った）異議申し立てと読みたい。短歌の個性尊重もまた同断ではあるまいか。

・閉じ込めて外出すれども猫なれば虐待ではないであろうよ

伊藤美恵子

語尾にある「すれど」「なれば」の畳み掛けのリズムの効果、下句の問い返し「ないないであろうよ」の粘着性など、見えないところで工夫のある歌。たかが猫の始末をどっちだっていいじゃないか

終わるところに拘って、読める歌に仕立てたたかな技巧には年季が入っている。発意の根にある「虐待」という際どい言葉が一首を引っ張り出した、というべきか。それを作者のやさしさと読むかは読者に委ねよう。

・ハラスメントの数の多さよ筆頭はバワハラ・ウクハラ・スモハラ・ハラハラ

白井 絹子

作者も読者も面白がって詠（読）む歌があってもいいか、というクイズまがいの異色作。横文字好きの日本人のひと騒がせには付き合えないが、それぞれのハラスメントの絵解きはしないでおく。結句の「ハラハラ」は「はらはら、どきどき」の「ハラハラ」という作者の合の手ではないことだけは申し添えておく。お暇な読者はどうぞネットで検索を。

・窓枠をかすめて雀の飛び去りて君の向こうが夕暮れていく

中村かよ子

何でもない歌に見えるが、やはり袖を引かれる感じだ。ちよっと切なくちよっと哀愁がちよっと洒落ていて、というところ。一首の文脈は明らかに近代短歌のバターンであるからだ。この作者の力量なら下句の甘酸っぱい詩的な雰囲気は、造作も無かる。あえて言えば、この作者は何を詠んでも詩になる。その視点は始めから詩人だと言っている。この資質がどんな詩的宇宙を見せてくれるか、愉しみな作者だ。

・片づけをはじめし夫の下心明日はいずこかの海辺に行くらし

長野 道子

夫は近くの他人、と読めば夫婦田満の見本のような歌。この作者

の夫を詠んだ歌はどれもいい。その距離感、その毒、その諧謔味のどれを取っても、けして読者に「ゴチソウサマ」と言わせないギリギリの領域で巧に詠まれている。

あえて「下心」と言い、「行くらし」と他人を装っているが、夫婦の呼吸は夫婦だけが知ることを公表することはない。

・拉致されしを取り戻さむと四十年 常美しきめぐみさんの母

西野美智代

この作者の歌は、いつも採ろうとしてつい躊躇してしまう。優等生の歌、と言えば作者のもっとも嫌いな批評になろうが、わたしには大方の作品はそう読める。この歌も真摯な詠み口で内容的に異論がない。だから隙間が無く作者の表情も見えない。

読者は実はその作品から削ぎ落とされた無意味や綻びに、作者の個性（顔）を見たいのである。敢えて言えば作品の裏に貼りついて「あられもなさ」が見たいのだ。「美は乱調にあり」である。

・雪の夜のしんしんと沁む独り居の今宵は灯すべてをつける

城 富貴美

一読明快な歌だが、気になるのは「独り居」の曖昧さ臭味。なぜ「独り居」と言わねばならないのか。この場合、事実だからという釈明は論の外である。だって詩は事実の模写ではないのだから。

ならば雰囲気盛り上げる技巧だろうが、わたしにはそれは物欲しげに見えてしまう。「わたしはこんなに淋しいのです」は言葉にすれば忽ち俗に墮ちる。「独り・独り居」は言わないからこそ詩になる。言えば説明で終わる。これはわたしの偏見には違ひなからうが、この偏見は今後とも押し通したい。

作品二、三 十首選



(五月号作品から)

桜井京子 選

本欄は今回からスタートした「作品二、三 十首選」として、特に印象に残った作品に所感を述べさせて頂くものである。

・待合室の鳩時計鳴り一斉にみんなの顔が上向きになる

大島 昌子

大勢の人が集まって何を待っているのだろう。この歌は鳩時計が鳴って、弾かれたようにみんなが同時に顔を上げた、その一瞬を見逃さなかった作者のお手柄。待っている時間というのは長く感じられるものだが、条件反射的に音のする方へ動いたみんなの顔、緊張感の奥に放心したような無防備な表情が目に見え、鳩時計から歌詠みである作者に、短歌のミュージックが飛び出した瞬間である。

・グアシグアシと家一軒を食いつくし更地の隅に恐竜眠る

小笹岐美子

ここは直前まで人の暮らした場所である。結句の「恐竜」は、家を取り壊した重機をそう見立てたのだ。初句のオノマトペは実感としてそう聞いたのかもしれないが、暴れまわる恐竜のすさまじさ、そこにあった過ぎし日の団欒まで破壊するような、言い知れぬ怖さがある。更地の隅の恐竜は、思うさま食欲をみだし満足した

だろうか。比喩の卓拔さに加え、かつて誰かの暮らしのあった家に対する、作者の愛着の深さが思われる。

・顔長きヤガラ売られる魚屋に煮ても焼いても食えると言書かれ

小原 裕光

めったに市場には出回らないという高級魚ヤガラ。添えられた説明書きが気が利いている。初句の「顔長き」は説明ではないかという向きもあるが、これがヤガラの外見上の特徴であり、ヤガラを知らない読者にも雰囲気伝わります。

この歌の面白さは、「煮ても焼いても食えぬ」の慣用句を逆手に取ったところにある。ここに惹かれた作者の洒落っ気に拍手を送りたい。煮てよし焼いてよし、残ったところはあら汁にしてまた美味しいというヤガラ。機会があればぜひ食してみたいものだ。

・センターは人手不足が常となり疲れが溜まりすり切れる時間

竹本 幸子

「香蘭」には数少ない職場詠。「センター」とは、事務処理を集中的に行う事務センターのことだろう。コロナ禍の影響で職場環境が大きく変わり、この職場もそのおろしを受けたものか。働くことは時間と体力を切り売りすることであり、働く側に負荷が掛かり過ぎると体調を崩すことにもなりかねない。使う側はコスパが至上命令だが、現代の労働法は安全配慮義務を課しており、無理を強いることは出来ないはずである。結句は切実な叫びと受け止めたが、時間が「すり切れる」と読めるので、ここは推敲の余地がある。

・昨日みて今日もまた見る蜘蛛の巣よ待つことだけが人生である

庄司 健造

何でもない蜘蛛の巣に對する感懐を述べたものだが、大仰に人生を持ち出して来たところが眼目。下句は漢詩「勸酒」で有名な「さよならだけが人生だ」を下書きにしていることは言うまでもない。

蜘蛛は巣を張った後は、来る日も来る日も獲物がかかるのをひたすら待っている。人間も同様に、生きることに飽きたり諦めたりしてはいけないのだという、作者の人生経験から導き出された答に味わいがある。だが待つてばかりではマイナス思考に陥るから、時には撃つて出ることも必要である。軽い詠み口の歌ながら、一つの蜘蛛の巣から、虚実綯い交ぜの人生論に發展して読ませる歌である。

・ファミレスの騒めきのなか私ではない「中村さん」が呼ばれていたり

中村 陽子

ファミレスで順番待ちをしている場面か。中村姓は特に珍しいというほどではないので、別の同姓の誰かが先に呼ばれたというだけのことだが、ここに作者の心が揺らいだ。「私」ではない「中村さん」はどんな人か、もう一人の自分がいるような奇妙な感じを巧みに拘っている。単に同姓というだけで縁もゆかりもないかも知れないが、何か不思議な連帯感に捕らわれて、想像が膨らむ歌である。

・右乳房全摘という現実を秋陽の淡き日に告げられる

安田 恵子

乳がんを患い大きな手術を受けた作者。自身に起きたことは自身引き受けてゆくほかはなく、今、穏やかな秋の日差しの中で作者に去来するものは何だろう。大仰な素振りを見せることはない作者であり、私は以前この作者の歌に対して「鈍感力」と書いたが、せて秋陽のような穏やかな日々が続くよう願っている。

・寒中の山から切り出す樺木なり今年で最後にすると言う友

柏原 貞雄

「樺木とは、椎茸を栽培するための種菌を植え付ける原木のこと。友は長い間、そのようにして椎茸を作り続けてきたのだ。高齢で体力に限界を感じたものか理由は定かでないが、やめてしまふのは惜しいことだ。貴重な原木栽培の作り手が減ることは、この国の農作物の未来とも重なり、作者は友の去就にすんなりと返事ができない。とはいえ、作者自身は今日も元気で畑に向かうのだ。

・飲む人と読む人がいて果てしなく会話がずれる「百年の孤独」

川久保百子

「百年の孤独」は焼酎の銘柄と思っている人が少なくないが、コロンビアの作家ガブリエル・ガルシア・マルケスの代表作としてベストセラーになった小説の名前でもある。お互いの思い入れで話しているからどこまで行っても話が噛み合わないが、この情景を捉えた作者のウィットを称えたい。それにしても「百年の孤独」とは見事な命名である。人間は百年も生きれば人生が終ってしまうのだから、いつそ生涯孤独だと開き直って生きる方がいいのかも知れない。

・どうせならしたいこととして暮らしたい君の生きざま 月が綺麗だ

馬場 美信

「百年の孤独」の後にこの歌を読んで、それもあたりだよね、と合点した。出来ることなら誰しもしたいことだけして暮らしたいが、「君」はそうしているようだ。「君」は実は猫ではないか、などとも思ってしまうが、作者は猫なる「君」の良き理解者であるらしい。折しも月が綺麗で、こんな夜は「百年の孤独」で乾杯するとしよう。

大正期の「香蘭」(二十)

千々和久幸

「香蘭」第四卷第九號(大正十五年九月号)で取り残した前月歌壇合評を続けて読む。「水滸」

(二) 抱ける兒の寝に入りけり圓き頭あぎとになでて獨り樂しむ 松田 常憲

(忠) 承前。いまま少し感觸の突いものがほしい。圓き頭あぎとになでて、ではあまりに安易であると思ふ。

全體として今少し心のうるほひが表現されてゐぬと私にはものたりない。

「霸王樹」

(二) 柳葉に風しづもりて夕づきぬ蚊遣のけむり立ちまどひつつ

(二) 夏ふかし爪切草の花のみがぼつりあかさあさのすゝかせ 桐田 落村

(嘉雄) (二) の歌、個性が無過ぎる。斯うした歌は女學生に委せて置いたらいゝ。(二)

の歌單純化が足りない。「夏ふかし」と最初のこととはつて、二句以下ではその夏の深い理由を述べ立てるのは同感できない、結句は甘い。

(秋石) (二) 常凡の境を安易に表現したるのみ、滋味だけのものである (二) ほこるべき

感覺の清新も見出せない、初句切れに對し結句の余韻が少しもひゞかない。要するに小手先きの歌たる難をまぬかれない。

「橄欖」

(二) 葉ごもりに光を放つ初螢今宵ただ一つ眼にとまりたり

(二) 草はみな重なり合ひてこの朝け露の深きにわが眼冴えたり 佐野 翠坡

(嘉雄) 一の歌、何でも無いが佳い歌である。何でも無いところが佳いのだ。くろうとの歌だと思ふ。其れから見ると (二) の歌は、鮮

新な境地を擲んでゐます。只だ初句二句は觀

方がおほまか過ぎる。下句はずはつて居ます。(秋石) 相當に作歌經驗を持つた人は、時に苦勞して平凡な歌を作る、そして割合に平易な境地は巧功を弄ぶ事が多い、(一) 初螢の感じが出て來ない、下句も安易に過ぎる、(二) 結句がしつくりせず言葉だけのものになつていゝる上句も冗漫な粗雑な感じがする。

「アララギ」

(一) 春蟬のこゑもこのころ聞かずなりてけながき雨氣あめいたりたるらし

(二) 夏霞おほにをぐらしわだつみの水をへだてて淡路あわじに對ふ 上田 耕平

(嘉雄) (一) (二) ともに柔らかな圓味をもつた手法で表現せられてゐる。(二) の歌、「わだつみの水」は少々ちとのびすぎてゐる。

(秋石) 調のなだらかな事も歌の要素である。二首とも調においてまさつてゐるが (二) はむしろ調にまかされた態である、もつと氣力のあるのが望ましい。

次いで前月歌壇抄を引く。今日見ても豪華な顔ぶれだが、往時の「香蘭」は歌壇作品にも広く目配りしていたことが分かる。

・さしなみに珠数のたま磨る板びさし椎の古葉をのせて久しき
北原 白秋

・拭き清めし机の上におきたれば影うつしゐる泰山木のはな
前田 夕暮

・ここにありし牧の大木戸あけしとき馬の句はみなぎりにけり
古泉 千櫻

・塔のしたの隈所に咲ける冬青の花わが言はざれば何人も見ざりき
川田 順

・田の泥のはねて乾けるわが顔は夕かたまけでこはばりしるし
吉植 庄亮

・街のうへにいざれてあがるすなほこり家並みの飾りくるめきて居り
釋 迢空

・汝が踏む真砂の音の間ゆるよわれはも行くをやめて聞きなむ
若山 牧水

・かすかなるものにもあるかうつせみのわが足元に疲なむる蟲
斎藤 茂吉

・うら侘びて我かゝる昨日けふの日も松は花粉をしきりにこぼす
中村 憲吉

・こんにやく玉割りてよろこべる子供等を二階よりわれは指圖しにけり
土屋 文明

本号末尾の「香蘭寸鑑」に、先に見た前月歌壇合評の評者の一人であった今井嘉雄が歌評について面白いことを書いていたので左に

引く。

：あれ（歌評）は評者も被評者もお互ひに勉強になつていゝ。むしろ評者の方の勉強になる。被評者の側からみると、悪くこき下ろされようが良く賞められようが、割合に無關心でいられるが、評者側からみると仲々さう簡単な氣持では居られない。假りに他人の歌を初句がどうだとか結句がどうだとか形式上から解剖臺にのぼせて（千々和註・取り上げるの意）みたり、境地がどうだとか感情移入がどうだとか、作歌動機がどうだとか。と内容上から批判してみたり、さて此の歌は良いとか悪いとか覺（千々和註・けりと読む）を付けて人に語つたり文章に書いたりするのだから評者の頭の程度がすぐに知れるだからどの歌評をみても正直さが足りない。と云ふのは無闇と他人の歌を賞めあげると、「何だ此の評者は此程度の歌に随喜渴仰の涙を流してゐる」と思はれはすまいか、と云ふ意識が暗々裡に動く。だから無条件で賞めることは決して無い。どこかに難癖を一寸でも付けて置かないと氣が済まないらしい。無条件でまあつて仕舞つては評者の估券に關はると思つてゐ

るのだから仲々面白い。

思わず笑つて仕舞つたが、笑い事ではすまされまい。おおよそ100年も前の先達の意見だが、評者たる者の涙ぐましい努力と忍耐には頭が下がる。「估券」（ともブライドとも）はことほど左様に大切なものらしい。現「香蘭」のあまた評者への宿題とお読みくだされば、なにがしかの参考になりましよう。

ついでに村野次郎先生の「編輯後記」を引いておく。先の今井嘉雄同人の意見と交差するところに注目して欲しい。

此際新會員其他に一言申上げて置き度いことがある。初めて投稿する人は假令如何なる人であつても香蘭では兎に角一年生なのである其處から心棒して行つて賞はなければならぬ。この道は一生の道である。一生かかつて兎に角ものになればよいのである。瞬間の泡沫のごとき虚榮や世間の手前を氣にして、この忍耐努力の出来ぬものは、私達と行を共にする資格があるものとは言はれまい。藝道修業では周囲から箔をつけてはならない自己の持つて居る力が自から外に光つて來るのである。

（引用は原文のまま）